

【史料紹介】大阪北の新地舞踊関係史料 佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信（下）

著者	笠井 純一，笠井 津加佐
著者別表示	Kasai Junichi, Kasai Tsukasa
雑誌名	人間社会環境研究
号	42
ページ	245-261
発行年	2021-09-30
URL	http://doi.org/10.24517/00064106



【史料紹介】

大阪北の新地舞踊関係史料
—佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信（下）—

人間社会研究域客員研究員（本学名誉教授）

笠井 純 一

人間社会研究域客員研究員

笠井 津加佐

Transcription of Letters to Komajiro Sato in the Collection of
Historical Materials Related to Dance Held by the Sato Family in
Osaka Kita-no-shinchi (2)Guest Researcher Institute of Human and Social Sciences
(Emeritus Professor at Kanazawa University)

KASAI Junichi

Guest Researcher Institute of Human and Social Sciences

KASAI Tsukasa

Abstract

This paper introduces letters in the Sato family's historical materials related to *Haru-no-odori* and *Onshukai* held in Kita-no-shinchi, one of the Osaka *Kagai*. The historical materials belonged to the current owner's grandfather, Komajiro Sato. It was the emergence of historical materials in Osaka *Kagai*, which were thought to have been destroyed by two large air raids at the end of World War II. In addition, the letters dated from the Taisho era to the beginning of the Showa era, and are valuable as historical materials that conveys the relationship between Osaka *Kagai* and culture and artistic activities which developed on a nationwide scale. For example, the opening of the *Tsukiji-shogekijo*, the movement of *Hanayagi-buyokenkyukai* and so on. Hence, these materials may be of interest to a wide range of researchers, particularly in the fields related to culture and society. We introduce them in two parts due to the number of characters. In this study, we introduce letters other than those involved in the Hokuyo Naniwa Dance, and consider the significance of each material.

KeywordOSANAI Kaoru (小山内薫), KEMA Nanboku (食満南北), SUDOU Goro (須藤五郎),
HASEGAWA Konobu (長谷川小信)

【史料紹介】

大阪北の新地舞踊関係史料—佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信(下)—

人間社会研究域客員研究員(本学名誉教授)

笠井純一

人間社会研究域客員研究員

笠井津加佐

要旨

本稿は、北の新地で行われた春の踊や温習会に関わる、大正期から昭和初期の書信を紹介するものである。全て北の新地の経営者であった佐藤駒次郎が受信したものであり、大阪大空襲で湮滅したと考えられてきた大阪花街の史料として希少価値を持つだけでなく、築地小劇場、花柳舞踊研究会、新舞踊運動など全国規模で展開された文化・芸術活動と花街の関りを伝えるものとしても貴重である。演劇・舞踊・文学・美術・音楽などの文化と、社会との関係を考えるための史料として、広く公開したい。紙数の関係から二回に分載し、本稿(下)では、北陽浪花踊と直接関係しない発信者の書信を翻刻・紹介する。

キーワード

小山内薫、食満南北、須藤五郎、長谷川小信

はじめに

本稿は、大阪北の新地で芸妓拔店・永楽席を営み、北陽演舞場の芸責任者でもあった佐藤駒次郎(一八八一—一九五〇)が受信した書状、葉書を紹介するものである。書信の大多数は、北陽浪花踊の歌・舞台装置などの担当者から駒次郎にあてられたものであるが、他に小山内薫や食満南北など、北陽浪花踊(以下「浪花踊」という)に直接の関りはないが、戦前期大阪花街の経営者と舞台人たちとの交流のうちがわせる書信が含まれる。これらは、浪花踊や北の新地温習会の舞台がどのように考案され、編成されたかを知るうえでも格好の史料である。

書信類は全て現在、駒次郎の孫にあたる佐藤恵氏の所蔵品で、かつて筆者らは調査を行い、知り得た書信の一部を翻刻・紹介した。その後、佐藤家史料の悉皆調査により、絵葉書や写真などととも別置されていた多数の書信を検出した。所蔵者の許可を得てここに報告する。

書信は大正四年(一九一五)以降敗戦までの四七点と、戦後の一三点からなる。本稿では戦前期の浪花踊関係者以外からの書信を翻刻

し、紹介する。

巻末に掲げた図版は、書信に添えられた田中良の自筆画（衣裳下絵・舞台下絵を含む）をはじめ、本文内容を補うために必要なものである。また「参考図版」は、書信に添えられたものではないが、本文を読むうえで有益と考えられる図版であり、全て佐藤家史料に含まれるものである。

差出人と書信の概要

史料の概要は（上）文末に表1で示したが、本稿ではその後に検出された書信を加え、駒次郎が戦前期に受信した書信の一覧を文末に再掲した。

本稿で紹介する書信の発信人は、梶川理兵衛、角屋某、小山内薫、食満南北、長谷川小信、須藤五郎、大みち某の七名である。以下、差出人と書信の概要を記す。

梶川 理兵衛 大正四年一月、大正天皇御大典を祝う絵葉書が一通残る。理兵衛は北の新天地「梶川席」の経営者で、名倉唯四郎編『浪花廻華』（明治三三）に氏名が見える。梶川席は古参の芸妓扱店であったが、大正一〇年以降の『北陽浪花踊番付』には店名が見えない。

角屋 某 大正九年一月、渡航先のワシントンから送った絵葉書一通が残る。差出人は未詳だが、「角屋」の下に「鳥」の一字が読めるので（以下はスタンプリンクが重なり、判読できない）、京都鳥原の角屋関係者かも知れない。日本出發（恐らく神戸港）の際、駒次郎の見送りを受けたらしい。

小山内 薫¹⁾ 大正一三年、築地小劇場が開場する時期のものが、三通ある。書信の内容は、二通が舞台作品の話で、一通は私信めいている。その書信に、二世寿輔の名前が記されている。明治三〇年ごろから、名古屋西川流が北の新天地に参入し始め、大正四年、浪花踊が復活されてからは、舞踊の振付は西川石松と花子が担当していた。ところ

が大正一四年、西川花子の逝去により、母・石松は高齢であることを理由に、北の新天地の担当を寿輔に変わって欲しいと言ったとの記事が、翌一四年『演芸画報』に掲載されている。書信は同時期のものである。

食満 南北²⁾ 昭和九年と一二年の書信が二通残る。内容は極めて簡略なものであるが、食満の遺稿『大阪芸談』（神戸女子大学古典芸能研究センター編）の記事と照合すると、食満の書信が単なる年賀の挨拶や観劇の礼状ではなく、次期の作歌者として予定されたことが推測できる。

須藤 五郎³⁾ 書信は三通が残る。昭和九年一月、東京宝塚劇場の竣工公演に関するもの、同一〇年、ドイツ、ライプツィヒ音楽院でゲオルク・アルフレート・シューマンに師事するための渡欧途中に門司から投函したと思われるもの、消印不明だが神戸出港後に「大みち」氏と連名で投函したもの、各一通である（後二者は、乗船したと思われる船の写真絵葉書を使っている。昭和一〇年は鹿島丸、消印不明のものは伏見丸で、共に日本郵船が大正初期に竣工し、欧州航路に使用した客船である）。消印不明の書信は、昭和一三、一四年の宝塚少女歌劇団第一回ヨーロッパ公演で指揮を担当した折のものである可能性がある。須藤と駒次郎の接点は昭和九年に遡り、東京宝塚劇場で上演された「宝三番叟」「花詩集」の作曲に、駒次郎が何らかの寄与をしたと推定される。

また、昭和一三年秋に出版した欧州公演演目の事前報道には、「浮世絵 彦根屏風」と記載されている。「浮世絵」と「彦根屏風」が併記されることは基本的にはないが、北の新天地で使用された「浮世絵」の名が見られることから、両者の交流が想起される。

長谷川 小信⁴⁾ 書信は、昭和八年の京都便りが一通である。小信は昭和六年から父（二代目貞信）とともに、『上方』（南木芳太郎編）の表紙絵を作成している。駒次郎との接点は南木であろう。

大みち 某 ドイツ・ベルリンで、大正一二年二月と九月に投函された書信が一通ずつある。内容は、二月のものはインスタント写真を

試した感想であり、九月のものは転居通知だが、関東大震災を案じる言葉もある。昭和一四年、須藤五郎と渡欧した「大みち」氏の可能性も含めて今後の課題としたい。

凡例

一、書信は浪花踊の担当者とそれ以外とに分け、発信人別、年代順に配列した。消印の判読が困難な場合は住所・内容などから推測し、明らかになった範囲で順位をつけた。期間に幅がある場合は、その最も遅い時期に置いた。

一、発信人名の下に「*」「**」印を付した書信は、かつて筆者らが一部を紹介したものである。「*」は拙稿「大阪花街・北新地と舞台美術家・田中良—佐藤家史料をもとに—」(『人間社会環境研究』第三六号、二〇一八、以下、「前稿」という)、「**」は拙稿「戦前期大阪花街における「北陽浪花踊」と「堀江この花踊」—踊りの詞章から、それぞれの特徴を考える—」(『人間社会環境研究』第三八号、二〇一九)である。

一、発信人名の下に括弧つきで消印を記し、判読できないときは「消印読めず」と記した。

一、書信は、宛先住所・宛名・内容・日付・発信人住所・発信者名など、記された全てを翻刻した。宛先住所氏名、発信人住所氏名は、それぞれを一括りに記載した。

一、官製葉書などで表裏のある場合、(表)(裏)で示した。絵葉書など宛先等と内容が上下段または左右に記される場合はこれを分ち、それぞれの末尾に(上)(下)、または(右)(左)と記した。

一、本文は現行の漢字に改めたが、異体字などは残した場合もある。

一、判読できない文字は☒で示した。

一、改行は斜線で示した。

ち空白をとり、発信人の住所氏名を記した。

一、自筆の絵が本文中に添えられている場合や、内容と関係のある写真絵葉書が使われている場合は、「図版」として番号を付し、末尾に纏めた。また、内容と関係の深い絵や写真を、「参考図版」として付した場合がある。

一、本文の後に、備考を○印を付して記した。内容は次項以下の通りである。

一、消印の判読できない部分や発信人が特定できない場合、その考証結果を記した。

一、今回の悉皆調査で新たに発見された史料により明らかになったこと、または前稿を訂正すべきことなどを記した。

一、その他、適宜類推されたい。

書信翻刻

浪花踊担当者以外からの書信

三五、梶川理兵衛ハガキ

(表)

大阪市北区曾根崎／新地一丁目／佐藤駒次郎様(上)

謹而／奉祝／御大礼

大正四年／十一月十四日／梶川理兵衛(下)

(裏) 大札記念 太平楽之図 (記念切手貼付) (略)

三六、角屋某ハガキ (消印: WASHINGTON, NOV. 28, 1920 カ)

(表)

Mr. K. Sato, Osaka, Japan

大阪市北区曾根崎新地／永楽席／佐藤駒次郎様(右)

拝啓 出発の際は色々御世話様／に相成候 途中至極健全にて桑港／

二泊シカゴ五泊寒いナイヤガラを見て／十三日ニューヨークに入り視察の上博／覽会とワナメーカー視察の爲二十三日／ワイラデルフィヤに参り候 田舎博覧会／に候へ共日本の出品図抜けて立派にて／評判に相成り候 二十六日当ワシントンに／参り候 今迄経過した米國都市の内／一番氣持のよい処に御座候 冬の一人旅／は随分つまらぬ困しきものに御座候／十一月二十八日ワシントンにて／角屋（島）□□

御会の節大西様よろしく御願申上候（左）

（裏）THOMAS CIRCLE, WASHINGTON, D.C.（略）

○ワイラデルフィアの博覧会は未詳。「ワナメーカー」は当地発祥の百貨店であろう。「大西様」は、北の新地「大西席」の経営者・大西熊吉か。駒次郎と共に、発信者の出国を見送ったのであろう。

三七、小山内 薫ハガキ*（消印：□□13614）

（表）

大阪市／北区曾根崎／新地／佐藤駒次郎様

愈開場仕候／これは「海／戦」の舞／台面／六月十四日／小山内生

（裏）（図版一六）

○築地小劇場の開場（大正一三年六月一三日）を報告するハガキ。

三八、小山内 薫ハガキ*（消印：□□13711）

（表）

大阪市／北区曾根崎／新地／佐藤駒次郎様

御不沙汰しました／暑熱甚しく候処／御機嫌如何／寿輔にも会ひました／小生は汗だくで毎日／稽古／珪子嬢はのつつそつつ／でトランプや編物と／首つ引。抑も／何の為に東京へ来たの／でせう 呵々／かつやへ宜しく／お宅の夫人へも宜しく／七月十日 薫

（裏）（図版一七）「狼」の舞台

○花柳寿輔と会ったことが記されている。丁度、北の新地の舞踊を担当していた西川石松が高齢となり、花子が亡くなったところである。舞踊担当者をめぐって、小山内薫に打診を依頼したのか、または公的な仲立ちを依頼したものであろうか。大正一三年二月『演芸画報』には、西川石松が高齢を理由に、北の新地の師匠交代を希望しているという記事が掲載されている。推測の域に留まらざるを得ないが、西川石松、小山内薫、二世花柳寿輔の関係が垣間見られる書信である。

三九、小山内 薫ハガキ*（消印読めず）

（表）

大阪市／北区曾根崎／新地／佐藤駒次郎様

第四回演公／今夜初日／その内「びろうど」のバラ」の舞台／

面 お目にかけて候／十九日／東京にて／小山内 薫

（裏）（図版一八）

○「天鵞絨の薔薇」上演は、築地小劇場の第六回公演であって第四回ではない。前稿参照。

四〇、長谷川小信ハガキ（消印：京都祇園8127）

（表）

大阪市北区／曾根崎新地／一ノ二二／佐藤駒次郎様

（印刷）大阪市西成区松原通／二丁目五十番地／長谷川小信

本日／帝展を兼て／顔見世を／小信／信廣

（裏）（図版一九）

四一、食満南北ハガキ（消印：昔屋9129）

（表）

大阪市北区曾根崎新地／一丁目二十二／佐藤駒次郎様

あし屋／食満南北

(裏) 賀正／元旦(図版二〇)

四二、食満南北ハガキ* (消印：芦屋12.5.14)

(表)

大阪市北区北の新地／北陽演舞場／佐藤駒次郎様

あしや／南北

(裏)

御ていねいに／ありがたう／なほ／をどり／面白く／拝見／しました(図版二一)

四三、須藤五郎ハガキ(東京中央、9.1.22)

(表)

大阪市北区曾根崎／新地一丁目(図版二二)／二十二番地／佐藤駒次郎様

二十一日 東京日比谷一丁目／東京宝塚劇場内／須藤五郎(上)

御無沙汰致して居ります／御壮健ですか／三番叟もお蔭で成功致しました 厚く御厚意を／謝します 花詩集も大変／な人気で喜んで居ります／僧院の場が矢張り一番／評判です 二十四日の晩には／家元の研究会へ荒島君と／お邪魔します お閑でした(マ)／一度皆様でお出かけになられ／てはいかゞですか(下)

(裏) 東京宝塚劇場観覧席写真(略)

○『宝塚歌劇五十年史』(宝塚歌劇団、一九六四)によれば、東京宝塚劇場は昭和九年一月に竣工し、元旦から月末まで、舞踊「宝三番叟」(久

松一声・水田茂作、須藤五郎作曲)、オペレット「パリのアパツシュ」(中西武夫・荒尾静一作、上野勝教作曲)、歌劇「紅梅殿」(久松一声作、須藤五郎・河崎一朗作曲)、レビュー「花詩集」(白井鐵造作、須藤五郎・河崎一朗作曲)の四曲を月組が上演した。須藤は作曲に際し駒次郎から何らかの示唆を受け、それが公演の成功に繋がったのであろう。

なお文面中の「家元」は二世花柳寿輔、「荒島君」は荒島鶴吉であろう。

荒島は、昭和初期の宝塚歌劇団の教師であった(『同』一三九頁)。

四四、須藤五郎ハガキ(消印：門司10.9.6)

(表)

大阪市北区曾根崎／新地一ノ二二／佐藤駒次郎様(上)

では元氣よく行つて参り／ます 皆様も御元氣で／向ふへ参りますれば定めし／多忙のためお便りも充分／に出来ない事だろうと存じます 便りがなければ元氣／よくやつて居るものとお許し／願ひます／門司にて／須藤五郎(下)

(裏) 日本郵船鹿島丸写真(略)

四五、須藤五郎他ハガキ(消印不明)

(表)

大阪市北区／北新地一丁目／永楽席／佐藤駒次郎様

伏見丸から／二十九日の夜(上)

御見送りをありがたう。／いまのところ鏡のやうな海／なので吾々が買切りのや／うにワイ／騒いでゐるのは有楽座の暮合に遊んでゐるやうな気がします／妻君によろしく(大みち)

昨晩は御馳走になり／まして今日は神戸迄／来て頂いて何んとも御礼の申上様も御座／いません 厚く御礼／申上ますこれから追々申上ます (下)

(裏) 日本郵船伏見丸写真(略)

○四四・四五はどちらも出発の挨拶状で、前者は門司、後者は神戸から出港しているが、船が異なるので別時点の渡航であろう。管見では、須藤は戦前期、昭和一〇年と同二三年の二回、渡欧している。前者が消印から昭和一〇年のものとすれば、後者は同一三年のものである可能性が高い。昭和一三年の渡航は、宝塚少女歌劇の欧州公演のためである。

四六、大みち某カード

(表)

21. Februar. 1923. / um. Wertheim. / Berlin. / H. Omichi (〇 版二二)

(裏)

これは移転届の為に撮した／速写真だ。伯林の三越ともいふべきデパートメントハウス／で撮したのだが、汽車の切符を／買ふやうに並んで待たねば／ならぬ程繁昌してゐる。勿論／速写真だから待つてゐるう／ちに来る故うまく撮る／わけもないが、こんなに絵葉／書にまでして勿驚一枚た／つた二銭五厘(十二枚で二／十七銭)だからあきれるだら／う。三越なんかとても足もと／へもよられまいテ

四七、大みち某ハガキ(消印: CHARLOTTENBURG 22.9.23)

(表)

Herrn. K. Sato. / Osaka. / Japan via America

大阪市北区北新地一／永楽席／佐藤駒次郎様(右)

旅行から帰るなり下記へ転宿する事／にしたから御承知を乞ふ。有名な／ハレンゼーの近処で閑静／なよい素人家だ。ルナパーク／へ近い。二三日後ライン河／下りをやつて来るつもりだ。／四五日位かゝる予定で、東／京の地震の詳細がまだ来な／いので誰かやられてゐないかと／心配してるのだ。先は御報せまで

H. Omichi. / bei Fr. Wlück. Katharinenstr. 3. Berlin, Wilmerdsd

ff (左)

(裏) ワグナー肖像画写真 (略)

音楽の大親玉／ワグネル／の肖像

ベルリンにて／一九二三年九月二二日□□□□

結びにかえて―佐藤家所蔵舞踊関係史料の意義―

最後に、佐藤家所蔵舞踊関係史料の史料としての意義を考えたい。書信自体が語る意義を三点、史料の残り方が示す意義を一点述べる。まず史料自体が語る意義だが、第一に田中良の昭和一三年一月の書信二通を取り上げる。田中の書信は、昭和一二年、日中全面戦争の影響を受け、大阪四花街が春の踊を中止する経緯に関わる書信である。『大阪毎日新聞』昭和一三年一月二三日夕刊は、以下のように伝えている⁵⁾。

浪華の春を彩る華麗な新町の「浪花踊」が国民総動員の戦局下に姿を消すことになり、これに続いて各廓の「春の踊」も中止の意向を示してゐる。(中略)北陽では「浪花踊」としてはこれを中止するが別の形式で「春の踊」を催すため準備を進めてをり、これによつて花街もいよ／＼戦時体制下の一色にぬりつぶされることになつた(後略)

北の新地が「別の形式で「春の踊」を催すため準備」とはどのようなことであつたのか、その点に関する記述が田中の書信(一九、二〇)に残されている。該当箇所を引用しよう。

昭和一三年一月三〇日付書信

謹啓、過日は浪花踊の件に付き電報を頂きましたが／其後の御模様は如何かと考へながら道具帳の方を進め／て居ります。実は東京の新聞に関西の春の踊は全部遠慮／に決定したとの通信が大きく出ましたので、家元とも話を致して居／りましたが、電報を頂いたので、昨夜も家元光来の際、御詳細を御待／ち致して居るむね話合ひました。兎も角時局は次第に複雑になつて／参りましたので、愈々益々大事を取らなければならぬこと、覚悟致／して居りますので、公私共に充分気を引締めて、非常時に対しな／ければなりません。(後略)

昭和十三年一月三十一日付書信

(前略) 例年と違ひ其／内容表現とか演出等にも相等の注意／と用意が必要かと思ひます。孰づれ／御目にかゝる時詳しい御相談は致しますが／道具衣裳等に付いても相等考へませう。(後略) また食満南北は、『大阪芸談』で「浪花踊」について以下の様に語っている⁶⁾。

△北陽浪花踊

これも其廓の曰く。(中略)そして更に大正四年四月、現在の北陽演舞場の落成と同時に、この浪花踊を復活第一回とし、爾來年殊に回を重ねて云々といふてゐる。(中略)

丁度本年、かつてから望んでゐた通り、いよ／＼私の作歌で再復活されようとしたのが無期延期になつて、其歌詞は空しくなつたわけだ。

神戸女子大学編集・発行『食満南北』図録⁷⁾の解説に、『大阪芸談』は昭和一八年頃の執筆とあるので、食満が用意した詞章は、昭和一七年、浪花踊の復活として行つた豊国踊⁸⁾のために用意したが使われず、昭和一八年三月には浪花踊が無期延期となつてしまつたので、そのまま「空しく」なつたと考えられる。そして今回発見された二通の田中書信から、北の新地が昭和一三年も、「別の形式」による浪花踊を検討していたことがわかつた。田中と食満の記述には五年の開きがあるが、北の新地が昭和一三年の後も、食満の協力を得て「非常時対応」で浪花踊をしたいと期待し続けたことが推測できよう。食満の書信(四二)は、両者の関係を裏付けるものである。結果的に大阪四花街は連携して春の踊の中止を決定し、昭和一七年に行つた豊国踊も内容は舞踊会であつた⁹⁾。戦時下大阪花街では芸妓も軍需工場での労働に奉仕したという¹⁰⁾。田中の書信は言うまでもなく、食満の書信はごく短いものが二通残るだけであるが、史料や聞き取り調査など複数

の証左を併せ検討すると、时期的なものもあつて芸妓や大阪花街に留まらない、大阪という都市の在り方へ繋がる契機となる興味深い史料であつた。

第二に、遠山静雄の書信を事例に、浪花踊関係者間の交流に関して考えよう。

佐藤家史料には数多の舞台下絵が含まれるが、遠山静雄の署名と推測される「遠」と書かれた舞台下絵が四枚ある。筆者らが『人間社会環境研究』第三六号¹¹⁾に執筆した時点では、これらが使用された作品名は不明であつた。その後の史料調査(大阪府立中之島図書館蔵愛蔵版番付)で件の舞台下絵は、昭和八年、第一九回浪花踊、第一場「天女祥瑞」第二場「妖姫の舞」第三場「萩の露」第四場「恋の五丁目」の舞台下絵であることが判明した。さらに第五場「襟化粧」の後半、第六場「さみだれ」第七場「春告鳥」三枚も佐藤家史料にあり、同調査で同じ作品の舞台下絵であることが判明したが、これらには署名がない。ただ、明らかに両者の筆致や構図、山並みや草花、木々の描き方は異なつており、色のほかし方や色遣いにも違いが見られる。そして、署名のない舞台下絵は田中良の筆致そのほかとよく似ている。

つまり第一九回の舞台下絵は、何らかの事情で田中と遠山が分担して作成したものと思われるが、愛蔵版番付には「舞台考案・田中良、同・野村芳光」と記され、遠山の名前はない。しかし簡易版番付には「舞台装置・田中良、同・遠山静雄」と明記されている。また愛蔵版の野村は例年なら舞台装置三名の筆頭に記される人物であるので、この回のみ番付作成時に何らかの手違いが生じたと考えられる。さらに田中が自著『舞台美術』に収録した(田中良)舞台装置上演記録¹²⁾の昭和八年五月の項には、赤坂温習会(東京劇場)と宝塚少女歌劇(宝塚大劇場)の記述はあるが、北陽浪花踊については書かれていない。

昭和九年の照明に遠山は参加していないが翌年には復帰しており、遠山の不在は昭和六年にも見られることから、何らかの事情で下絵を

両者で分担したが、例年とは異なるやり方に愛蔵版番付に不手際が生じたものという推測で良いように思われる。

遠山の書簡(昭和十二年)は一通しか残されていないが、「いづれ田中様と打合せ考案仕るべく候」とあり、その連携が窺われる。このように、舞台下絵や番付から連携に問題が生じたかと思われるケースも、書信により交流が見えてくる。

なお田中のものと推測される無記名の下絵と「遠」の署名(遠山静雄のものか否か)に関する追跡は、今後の課題としたい。

第三に、駒次郎が妻・ハナに送った書簡を掲げよう。これをもとに第三点として、北陽浪花踊と花柳舞踊研究会との、深い関わりを指摘したい。

○佐藤駒次郎書状(東京中央、9.11.30)

(封筒裏)

大阪市北区曾根崎新地／一丁目二十二番地／永楽／佐藤ハナ様

(封筒裏)

東京／佐藤／十一月三十日

(丸の内ホテル便箋)

浪花踊の打合せをすまして 一日の菊五郎の初日を見て／帰へると云ふて居りましたが 今度踊りの作歌を／長田さんをやめて木村富子さんに頼む事に／なつたので 其打合せを一日夜から二日の午後一時と／二度 木村さんにお目にかゝる都合になり 二日のばん／こちらをのります故 三日の朝帰へる事になります／今度は 花柳さんや田中さん遠山さんが芝居の／けいこでとてもいそがしくて 昨晚も一昨晚も／夜の二時までかゝりました(以上一葉目)

よるをそのいので かぜがなをりきりませんので／ひるわ半ぶん寝て居ります／ねつは少しもありません故 心配する程の事／はありませんがしんどいのでとびあるく／事が出来ません／今日は

一日ひまですから新国劇の芝居を／見に行きます K(以上二葉目)

右は、追加調査で発見された佐藤家史料中唯一の駒次郎書信である。昭和九年一月三〇日、投宿先の東京・丸の内ホテルで認めた書簡で、第二一回浪花踊の作歌者を木村富子に変更したため、帰阪が遅れることをハナに報じたものであるが、既に紹介した書信と照合する

とき、重要な事実が判明する。

駒次郎はこのとき、翌年五月の浪花踊打合せのため上京した。当初は簡単に済むと思っていた打合せは、意外に時間がかかった。その理由は、「今度踊りの作歌を／長田(幹彦)さんをやめて木村富子さんに頼む事に／なつた」からである。この文面からは、作歌者の変更は従来から駒次郎が考えていたことではなく、彼が上京して初めて決まったことのように読み取れる。おそらく北の新天地では、文面にも見える「花柳さんや田中さん遠山さん」が駒次郎と協議・連携しつつ、舞台全体を作っていたのだろう。そのことは、(上)で紹介した田中の書信(五、九、一三、一四、一六)からも一部読み取れるが、この駒次郎書信によって一層明確に指摘できる。北陽浪花踊は、花柳舞踊研究会の主要メンバーが総力で担当する舞台だったと言っても過言ではない。なお、(上)の木村富子ハガキ(二九)にいう「先頃」「前節」は、この時の打合せを指すのであろう。

続いて、史料の残り方が示す意義について考えてみよう。

表1に示すように、ほとんどが直接また間接に舞踊、または演劇と関わる書信であった。戦後の書信が葬儀など私的な書信であることと対照すれば、戦前期の書信は、駒次郎が花街の舞踊史料として残そうと意図したものであると言えよう。その意図は、一面では南木芳太郎の上方文化保存に共鳴したものとも考えられるが、彼の育った家庭の意識に依るところが大きいのではあるまいか。悉皆調査では、恵氏の許可を得て佐藤家過去帳を拝見した。江戸末期から続く家系であるが、

残念ながら現時点では卯之助以前に言及できるほどの調査ができていない。

しかし、卯之助(駒次郎の父)が席主となり二度も立て直した永楽館は、笹部新太郎が特筆する風雅と新奇を兼ね備えた場であった¹³⁾。また、東京から芸人を呼ぶなど、興行でも工夫を凝らしたようだ¹⁴⁾。

席主としての工夫や気概、誇り、それらを芸妓養成、花街の芸能といった形で継承した駒次郎にとって、花街資料は文化を後世に残すためにだけ重要だったのではなく、戦後の浪花踊復活のために不可欠なものであった。駒次郎が残した資料を、妻・はな、娘・笑子は、駒次郎が亡くなって二年后に誕生した恵氏を育てながら守り続けた。恵氏は現在、舞踊家は引退しているが、舞踊に深く関わったものとして史資料を継承している。大阪大空襲等でほとんどの花街史料が湮滅したなかで、佐藤家は花街史資料を守り続けた。

駒次郎が花街の芸能者として残したかったものは何か。今回、紹介する史料は書信のみであるが、書信以外に佐藤家に残された史料も、番付や舞台下絵、舞台衣裳下絵、舞踊の映像など、概ね舞踊に関わるものであった¹⁵⁾。それは駒次郎が、芸妓の真性は舞踊であり、舞踊こそその存在理由であると考えていたからであろう。佐藤卯之助から続く北の新地の芸能関係者として、佐藤家が守ったもの、それは舞台芸術という総合的な性格から多岐にわたる分野と、鉄道など交通網が充実した背景による花街芸能ネットワークの広がりを示す史料であった。地域と時代を超えて、花街の芸能関係者と芸術家たちの活動が接近し、互いの芸の昇華のために協力関係にあった時代を語る史料は、花街の一面を示すのみならず、芸能全体の一面を伝える貴重なものとして、存在意義があるものと思われる。

【注】

1) 小山内薫：明治一四年(一八八二)生れ。近代演劇の黎明期に研究(ゴードン・グレイグの研究)や実践(自由劇場の結成と築地小劇場の設立)で活躍し、近代演劇上演の基礎を築いた。イブセンら自然主義戯曲や、チエーホフやゴッリキーなどの紹介と上演を行った。昭和三年(一九二八)急逝。国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第二巻、吉川弘文館、八二二頁参照。

2) 食満南北：明治一三年生れ。早稲田大学在籍、坪内逍遙への師事など、時期等は未詳である。東京歌舞伎座作者部屋での作者修行や、帰阪後の十一代目片岡仁左衛門の座付き作者など、短期間に終わる。松竹所屬、初代中村鴈治郎付き作者として活躍した。また歌舞伎のほか、文楽の脚本や脚色も手掛け、松竹歌劇団や南地五花街の踊りの作歌も手掛けた。昭和三年歿。神戸女子大学古典芸能研究センター『食満南北著』大阪芸談』刊行記念展示「食満南北」図録』二〇一七、一頁参照。

3) 須藤五郎：明治三〇年生れ。大正一二年(一九二三)、東京音楽学校を卒業。宝塚少女歌劇団で作曲と指揮を勤めた。昭和一〇年度渡欧し、ドイツのライプツィヒ音楽院でゲオルク・アルフレート・シューマンに師事した。昭和一三年から一四年、宝塚歌劇団第一回ヨーロッパ公演で指揮を担当した。科学研究費補助金(基盤研究C)「近代日本の音楽家に関する研究」(研究代表者：塚原康子、平成17・18年度)に基づく「東京音楽学校在籍者データベース」(二〇一八)、宝塚少女歌劇団発行『日・独・伊親善芸術使節 渡欧記念アルバム』(一九三九)、毎日新聞社『別冊一億人の昭和史タカラヅカ 華麗な舞台とスターを育てた70年』(一九八一、一五五頁、一六〇頁)、細川周平・片山杜秀監修『日本の作曲家 近現代音楽人名事典』(日外アソシエーツ、二〇〇八、三七五頁)、参照。

4) 長谷川小信：明治一四年生れ。小信は三代目貞信の前名。大阪の浮世絵師で、明治初期から昭和中期にかけて活躍した。昭和三八年歿。

- 5) 明治大正昭和新聞研究会『新聞集成 昭和編年史 十三年度版Ⅰ』(有新聞資料出版、一九九一、二二一頁。
- 6) 食満南北『大阪芸談』神戸女子大学古典芸能研究センター編、和泉書院、二〇一六、二五三～二五四頁。
- 7) 神戸女子大学古典芸能研究センター『食満南北著『大阪芸談』刊行記念展示「食満南北」図録』二〇一七、一頁。
- 8) 『大阪毎日新聞』一九四二年九月二一日付紙面「五年振り 浪花踊り復活 未熟な芸妓の出演は御法度」、『同』一〇月二一日付紙面「浪花踊十一月から復活」、『同』一九四三年三月二一日付紙面「豊国踊」は無期延期 京の都踊は存続。
- 9) 「南北新町堀江の大阪代表四遊廓の温習会が、事変後初めて総合形式で開かれたことも珍しい」高谷伸「十一月大阪劇信」『演芸画報』一二月号、一九四二、二九頁。
- 10) 田村富子氏証言。二〇一八年九月二二日記録「もうみんな、挺身隊行つてはったよ。(中略) 朝はよから、芸妓さんが朝はよ起きることないのにな」。
- 11) 笠井津加佐・笠井純一「大阪花街・北新地と舞台美術家・田中良―佐藤家史料をもとに―」金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間社会環境研究』第三六号、二〇一八。
- 12) 田中良『舞台美術』西川書店、一九四四、所収「舞台装置上演記録」九頁。
- 13) 笹部新太郎「北の新地と永楽館」『大阪弁』第三輯、清文堂、一九四九、一〇六～一一五頁。
- 14) 笠井津加佐・笠井純一「【史料紹介】「大阪北の新地 舞踊関係史料―佐藤家所蔵 佐藤駒次郎宛書信(上)―」金沢大学大学院人間社会環境研究科『人間社会環境研究』第四一号、二〇二一、二頁。
- 15) 佐藤家史料の概要は、第六六回東洋音楽学会大会で報告を行い、『人間社会環境研究』第三二号で研究ノートとして纏めた。笠井津加佐・笠井純一「北陽浪花踊の新出史料と大阪四花街「春の踊」の変遷」

二〇一六。

付記

本稿は、笠井純一を代表者とする科学研究費助成事業「戦前期大阪花街の社会的機能に関する基礎的研究―芸能と社会との関係を中心に」(基盤研究(〇) 課題番号: 18K00925、二〇一八～二〇二〇年度) による研究成果の一部です。なお二〇二〇年九月四日、オンラインによる研究会で本稿の概要を報告し、当日参加された研究分担者・田村義也氏、塚原康子氏、藤田勝也氏、研究協力者・大西秀紀氏には貴重なご意見や情報をいただきました。厚く御礼申し上げます。



図版三



図版四



図版五



図版七



図版一

図版(上)



図版二



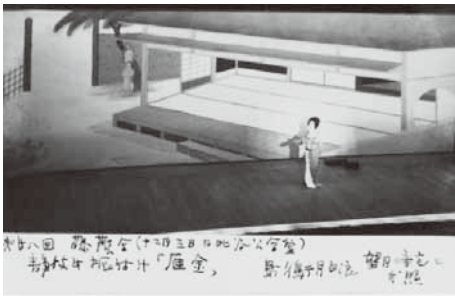
図版六



図版一



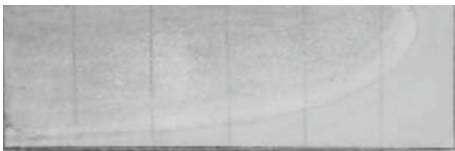
図版八



図版三



図版九



図版一三



図版一四



図版一〇



(参考図版2)



(参考図版3)



(参考図版4)



図版一五



(参考図版1)



図版二〇



図版一六

図版(下)



図版二一



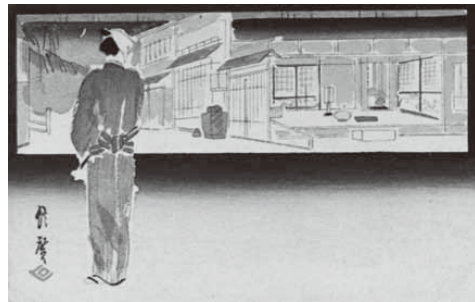
図版一七



図版一八



図版二二



図版一九

表1 佐藤駒次郎宛書信 戦前受信(一覽)

差出人	点数	No.	投函日	主な内容
田中 良 (1884-1974)	20	1	大正 12. 9. 27	関東大震災見舞いへの礼状、到来物への礼状、舞台下絵用資料、踊の舞台美術や道具、衣裳に関する打合せ、観劇の感想や近況報告、戦局から「浪花踊」自粛を考える内容の手紙
		2	2. 7. 12	
		3	2. 10. 4	
		4	3. 3. 12	
		5	4. 3. 4カ	
		6	4. 4. 15	
		7	4. 5. 30	
		8	5. 4. 14カ	
		9	6. 4. 16カ	
		10	6. 10. 15	
		11	昭和 7. 4. 29	
		12	8. 9. 4	
		13	8. 9. 8	
		14	8. 9. 20	
		15	8. 12. 4	
		16	9. 2. 2カ	
		17	9. 4. 13	
		18	9. 4. 28	
		19	13. 1. 30	
		20	13. 1. 31	
半井桃水 (1861-1926)	1	21	大正 13. 12. 15	自作の歌「山色達天」
岡 嘉太郎(鬼太郎) (1872-1943)	6	22	昭和 2. 6. 12	舞台写真、招待券、番組、歌詞などの送付に対する礼状、挨拶状
		23	2. 8. 31	
		24	3. 3. 28	
		25	4. 5. 12	
		26	3-5. □. 27カ	
27	大正カ 15. 5. 21			
木村富子 (1890-1944)	6	28	昭和 8. 12. 30	謝金への礼状、歌詞の打合せ、作歌上の問い合わせ、木村富子が執筆した雑誌贈呈の挨拶状、献本への礼状
		29	9. 12. 17	
		30	12. 1. 21	
		31	12. 1. 28	
		32	12. 2. 10	
33	12. 5. 21			
遠山静雄 (1895-1986)	1	34	昭和 12. 2. 16	舞台照明打ち合わせに関するもの
梶川理兵衛	1	35	大正 4. 11. 14	御大典祝
角屋 某	1	36	大正 9. 11. 28カ	アメリカ視察の報告
小山内薫 (1884-1950)	3	37	大正 13. 6. 14	築地小劇場開場や演目の通知
		38	13. 7. 11	
		39	13. □. 19カ	
長谷川小信 (1881-1963)	1	40	昭和 8. 12. 7	京都からの便り
食満南北 (1880-1957)	2	41	昭和 9. 1. 2	年賀状と礼状
		42	12. 5. 14	
須藤五郎 (1897-1988)	3	43	昭和 9. 1. 22	東京宝塚劇場竣工・開演の報告
		44	昭和カ 10. 9. 6	外遊見送りに対する礼状
		45	年月未詳. 29	
Omichi 某	2	46	大正 12. 2. 21	ドイツでの転居通知など
		47	12. 9. 11	